

テーマ

ふるさと川本町が大好きになる
地域の方や高校生と楽しむサマーキャンプ

事業実施地区（中学校区名）	川本中学校校区
事業実施公民館等名 （中学校区内にある全ての公民館等）	町内全公民館（川本中央公民館、川本北公民館、川本西公民館）

テーマの背景

近年、川本町全体として、夏に子どもたちに思い切り自然体験をさせるプログラムがなかった。各公民館においては、限られた地域の子どもの対象に合宿や体験活動を実施しているものの、3つの公民館が連携して子ども対象の事業をすることはなかった。今年度、県の「公民館ふるさと体験事業」を受けることもあり、サマーキャンプを企画した。

現在の川本小学校は、6年前3校が統合してできており、校区が広い。そのため、住民側からみれば普段子どもたちの声がしない地区があったり、子どもたちにとっては行ったことのない地区がたくさんあったりする。そこで、普段子どもたちと接する機会の少ない地域の方と触れ合いながら、様々な体験活動を通して自然豊かな川本町の魅力に気づいてもらおうと活動場所や支援者を選択した。さらに、子どもたちの自主性を引き出し、思いをくみ取りやすくするため、年齢の近い高校生も支援者として参加してもらうことにした。幸い、高校生も地域活動や小学生との触れ合いを望んでいた。

実際の取組

③子供たちに伝えたいテーマ・題材の事業実施

事業名：かわもとサマーキャンプ 2017

<取組の概要>

主に3つの地域を拠点としながら、テーマを「山での活動」と「川での活動」とした。企画段階から、キーとなる地域住民にも参加してもらい、活動のねらいを共有してから内容を考えていった。2泊3日のべ参加者は、児童14名、高校生6名、当日のボランティア7名、実行委員10名の計27名。

北公民館を拠点に「竹のはし・コップづくり」「野菜の収穫体験」「自然史の学習」、市井原地区を拠点に「川遊び」「鮎のつかみ取り」「田んぼビオトープの学習」、場所を移して「江の川本流での川遊び」、湯谷地区での「野外炊飯」「テント張り」「竹灯籠」「魚釣り」などを行った。高校生には、活動の計画や振り返りをする際にグループのリーダーを務めてもらった。地域の方々も子どもの姿に喜び、高校生も小学生と一緒に体験活動を楽しんだ。小学生も川本町の自然を存分に味わい、満足そうであった。企画から関わる地域の方もどのように活動を仕組んだらよいのか、また子どもに関わればよいのかを試行錯誤されながら考えておられた。

<成果と課題>

小学生と関わる高校生は、「どのように注意したらよいのか。」など悩みを持ち、スタッフノートに書き込んでいたが、それを活用した大人のフォローアップが不十分だった面がある。また、本流での川遊びについては、さらに専門的な支援者に協力を依頼するなど、安全面での配慮が必要である。しかしながら、今回関わっていただいた高校生や地域の方は、大変満足されており、次回への期待も高まっている。そのような方々がさらに意欲的に活動できるように、サマーキャンプ以外でも子どもたちと関われる場を企画していきたい。児童にとっては、ふるさとの自然をテーマに普段できない貴重な体験をすることができたと思う。さらに地域資源を生かした新しいプログラムを考え、提供していきたい。



竹の箸づくりに苦戦



川で逃げ出した鮎を追いかける

まとめ

テーマに迫るためのポイント

1. 地域資源（ひと・もの・こと）の活用
この事業を計画しながら、改めて地域資源を見直すことができた。
2. 企画段階からの地域住民の参画
子どもの活動に関心があり、地域の要と成り得る地域の方に企画段階から参画していただいた。
3. 拠点となる各地域を挙げての取組
実行委員である地域の方がさらに各地域の住民に声をかけ、活動の輪が広がった。
4. 小学生と年齢の近い高校生のサポート
小学生にとって、気軽に話ができるお姉さん、お兄さんの存在が安心感につながったと思う。

今後の展望

この事業を継続していくとともに、新たな活動拠点の発掘、新たなプログラムや人的資源を開発していきたい。特に保護者世代を主な対象とした野外活動研修会を実施し、子ども達のキャンプを支える人材の育成や子どもたちをキャンプに送り出す家庭の理解を深めていきたい。連携においては、自治会をはじめ、学校、PTA、商工会や事業所、専門的な立場の少年自然の家等との連携を考えていきたい。

(文責：川本中央公民館 派遣社会教育主事 佐々木 努)